

令和7年度第1回大津市青少年問題協議会 会議録（要旨）

- 1 日 時 令和8年2月10日（火）10時～12時
- 2 場 所 大津市民文化会館2階会議室
- 3 出席者 [委員]小谷委員、森川委員、木澤委員、内田委員、笥委員、蔵永委員、山崎委員、幸重委員
(欠席) 糸田委員、西田委員、今村委員
[事務局]こども・若者政策課長、課長補佐、こども青少年係長、こども青少年係主任
- 4 傍聴者 1名
- 5 次 第 (1) 開会
(2) 委員紹介
(3) 会長、副会長の選出について
(4) 議題 ①大津市子ども・若者支援計画（前計画）の進捗状況について（報告）
②大津市こども・若者支援計画（現計画）における若者支援について（意見交換）
- 6 会議録（要旨）

(1) 開会

こども・若者政策課長挨拶

事務局から協議会趣旨を説明（資料1）

(2) 委員紹介

事務局から協議会委員を紹介

(3) 会長、副会長の選出について

現在の委員での最初の協議会のため、会長、副会長を選出

[会 長]蔵永 瞳委員

[副会長]笥 美貴委員、木澤 義樹委員

(4) 議題

①大津市子ども・若者支援計画（前計画）の進捗状況について（報告）

事務局から説明（資料2）

【質疑応答等】

委 員：計画期間が令和2年度～7年度で、コロナ禍だった。計画はそのことを想定せずに策定したため、計画どおりに実施するのが難しかった時期だったと思う一方で、コロナ禍によって若者の環境やいろいろなことが変わってきたと思う。5年間の計画の総括として、コロナ禍における影響やそのことでより発展した部分などがあれば教えていただきたい。

事務局：コロナ禍の期間、多くの活動が滞ってしまった。地域の活動、子どもたちの見守り、様々な集まり、体験活動などの数が縮小してしまったところがある。その結果子どもたちにとって良くない影響が

あったと考える。現計画の策定においても、前計画の評価でそういった機会が減ったことにより、子どもがどのような状況になったかというところも踏まえて、今後どういった取組ができるのか考えさせていただいた。一方で、窓口のオンライン化が一定進んだことなど、市としても意識が変わったところがあると思う。コロナ禍で進んだ部分も踏まえて新しい計画における取組を考えたところであり、コロナ禍の影響も考慮した上で新しい計画づくりになったと考えている。

委員：資料3ページの主な取組の中学生広場について、中学生の延べ人数が令和6年度557名、令和4年度と5年度1,000名以上だが、令和6年度に減少した理由は何かあるのか。

事務局：この人数は、市内の各中学校に作文の募集をして提出があった人数。学校によって全体で取り組んでいただくところや一部で取り組んでいただくところがあり、その状況によって数が上下する。令和6年度は作文を提出いただいた人数が少なかった。学校によって全校生徒に作文を募集する年と2年生にだけ募集する年など、その年の取組状況によって増減したことになる。

委員：その部分は学校にお任せしているのか。

事務局：学校にお任せしている。

②大津市子ども・若者支援計画（現計画）における若者支援について（意見交換）

事務局から説明（資料3）

【質疑応答等】

委員：大津市子ども・若者支援地域協議会のグループワークで話した内容を共有する。就労支援において、問題を抱えた子どもは小学校、中学校の勉強が身につけていない。就労に進んでも、教育が身につけてないとすぐに辞めてしまう、サポートできない状態になる。あらためて教育が大切だということで、少年センター等に行ってもらい、まず勉強してもらおう。それから就労支援に繋げていけばいいのでは、という話があった。そのようなことを支援地域協議会では話している。

委員：大津市子ども・若者支援計画の冊子は毎年更新されるのか。

事務局：5年間の期間のため、冊子自体は5年間のものとなる。

委員：計画50ページ、少年センターの「学校支援アドバイザー派遣事業」について見直しを図った。市内小中学校の問題行動の未然防止などの取組を進めていたが、問題行動が多く、課題が山積していることから、少年センターを挙げて取り組むこととなり、少年センターの指導員9名（大津6名、堅田3名）で手分けして学校へのアドバイス等に取り組もうと考えている。アドバイザー派遣事業としては令和7年度で終了し、その後は学校支援指導員の派遣という形で今後取り組んでいく。

委員：基本方針1「子ども・若者が自由に意見を表明する場と意見を反映させる仕組みづくり」について、計画を策定されるにあたって、いろいろと斬新な取組をされていると評価している。計画の中で、そういった取組への参加人数等も記載されているが、計画166ページ「SNSを活用した意見を聴く取組」について、参加人数や件数等が記載されていないが、どんな効果があったのか、または、苦戦

しているのかなどについて教えていただきたい。

事務局：LINE オープンチャットの運用については苦戦をしているところ。スタート時は大学と高校に周知して試行的に運用した上で本番運用を開始した。試行事業では何件か意見をいただき、フィードバックもオープンチャット内で実施した。実際はチャットでやりとりをするというより、市の施策に対して高校生・大学生がどう考えるのか質問をして、それに対して意見をいただきたいという形にしている。市の施策を理解してもらうこと、それに対して高校生が意見を言うことは SNS で匿名性があってもなかなか難しい。大学生に伺ったところ、匿名であっても、まず一人目として意見を言うことに抵抗があるという意見もあった。SNS として LINE が意見を言いやすいのか、どういう形で運用していくべきか、若者世代の方に意見を聴きながら検討していきたい。

委員：フィードバックがすごく大事。意見を聴きっぱなしだったら結局なんやねんとなる。対面でのワークショップの場合は話した人はその場で聞いてもらえたと思える。県の取組で、県知事への手紙の子供向けバージョンをやっていて、まあまあレスポンスされている。実際に書いた手紙に対して、「こうできます。」などの返事が返ってくると、パブリックコメントっていいものだと感じる。大津市でも市長がこども・若者の意見について返してくれるよというコーナーにすると、中高生も「市長に意見言えるんだ。」となって話しやすいかもしれない。レスポンスもくるのかと思う。

【質疑応答後各委員から取組内容等について意見交換を実施】

(5) 閉会